

1928年、建国間もないトルコ共和国において、アラビア文字（旧字）の廃止とラテン文字（新字）の導入、いわゆる文字革命が断行された。当時のトルコは、オスマン帝国以来の伝統的社会構造を脱し、西欧に範をとる近代国民国家を創出しようと、司法、教育、社会慣習などさまざまな分野で改革が行われているまさにそのときであった。同じく急進的な改革の対象になった文字や言語には、近代化、世俗化、国民化という問題が焦点化されている。ここで決定的に重要なのは、オスマン臣民から均質的なトルコ国民を生み出すことが焦眉の問題であった当時において、文字革命が、「トルコ人」としての国民意識形成のためのきわめて重要な政治的選択であったという点である。アラビア文字の放棄は、文字という聖なる記号を媒介することによって繋がる古典的共同体からの離脱であり、あらたな規範としての新字の受容とは、ある意味で、ケマリズムにもとづいた近代トルコ国民の想像の共同体を形成するという意味をもった。

トルコにおける文字革命は、表記法の転換がきわめて大規模かつ短期間に完遂され、かつ識字化をもたらした成功事例として非常によく知られている反面、この決断がいかなる経緯をたどって決定され、いかに実行されたのか、そしてこの選択が、その後のトルコ社会にどのような影響をもたらしたのかということは意外なほど明らかでない。そこで本研究は、国民形成プロジェクトとしての側面を持つトルコ共和国における文字革命の実態を、資料に基づいて実証的に再検討した。資料として、トルコ共和国公文書館所蔵の政府文書に加えて、党や政権側にいる支配エリートたちの視線を切り取るため、政治指導者の演説、および政策実施当該時期の新聞に掲載された論説類を用いた。また、実態を包み隠さず映し出しているとはいいがたい新聞資料の空白を埋めるために、共和国建国期の民衆社会の様子をうかがい知ることのできる回顧録、口述資料の類の積極的な利用を試みた。

本研究は、文字革命に到るまでの歴史的叙述を中心とする第一部（第一章～第三章）と、文字革命の実質的プロセスおよび結果を扱う第二部（第四章～第七章）から構成される。

第一部、第一章では、アラビア文字を用いたトルコ語表記が内在する問題を整理した上で、オスマン帝国近代化期において、文字をめぐる問題がどのような理由により生じたのかについて、印刷をはじめとする西欧近代技術の流入と近代教育の開始という二つの点と関連づけて取りあげた。第二章では、技術的課題に端を発した文字および正書法改革の議論が、オスマン帝国期からトルコ共和国建国へと時代が移り変わるなかで、どのように政治的

なものに移行していくのかを、近代と伝統、世俗的価値観と宗教的価値観の間で揺れ動く知識人たちの意識に注目しながら跡付けた。また、こうした議論のなかで生じた正書法改革の試みと挫折についても取りあげた。第三章では、1928年5月の言語委員会設立から11月の新字法制定までの新字導入決定プロセスを詳らかにする。それまで知識人たちの議論のなかで形成されていった言説が、いかに文字革命をめぐる公式の言説に継承されていったのか、また新たな文字表象と二重写しになった理想としての国民の姿が政策実施者の論理展開にどのように反映しているのかについても論じた。

第二部、第四章では、まず、法的な規制のもとでなされた新字導入と普及に関わる実質的な政策がどのように達成されていったのかを跡付けた。印刷、出版産業をはじめ、法的な規制が直接的に及ぶ領域では、即座に対応が迫られ、文字の切り替えは比較的早い段階で達成された。政策実施者たちは革命の成功イメージを一気に波及させることになる都市景観の変化に、積極的に介入した。とりわけ、日々人びとの目に触れる看板や標識など言語景観に関わる規制は厳格な形で適用されていた。新字使用および旧字の不使用に対する強い意向ははっきりと示されており、時として法が規制する以上に踏み込んだ対応がとられた。

次に、新字普及の足がかりとなった、公務員、特に教員、役人、宗務関係者に対する教育について取りあげた。政策実施者たちは新字導入初期において、指導的立場にある層として知識人や教員をはじめとする公務員を設定し、彼らの自意識を刺激した。そこでは、新字の習得、使用、普及は愛国的行動として奨励され、反対に旧字使用は反動的行動とみなされ、国家への罪であるとの見解さえ打ち出されることになった。しかし、本質的な意味で彼らの新字習得を支援し、下支えする仕組みは存在しなかった。教育省は公務員の新字学習の監督責任は負ったものの、実質的な作業は各省庁、組織、地方自治体など現場の担当者に丸投げされていたといえる。

第五章では、新字法の発布後、一般成人国民に対する識字教育を目的として設立された国民学校の活動をつうじて、識字化教育と国民形成について論じた。国民学校をはじめとした大衆向けの識字化政策は、その規模にも関わらず期待されたほどの成果を上げることができなかったが、重要なのは識字化活動の目的は必ずしも文字習得に限らなかったことである。国家事業としての識字化教育の本質は、国家の指示のもと新字の習得を目指すなかで、人びとの持つ共同体の成員としての意識を増幅させるという点にあった。国民学校への参加、ないし新字の習得は、ある個人が共和国が掲げる近代的価値観を共有し、体制側に忠実な模範的国民であるかを測るためのバロメーターとして機能していたのである。

第六章では、新旧ふたつの書記規範の併存状態について論じた。文字革命を考えるにあたって、新字の普及と同時に重要なのは、伝統的な書記規範である旧字表記がいかに無効化さ

れたのか、ないしはどこで、どの程度残存したのかという点の究明である。文字革命の決定的な目的の一つが、共和国革命の理念であるところの、旧体制の象徴の排除によるオスマン＝イスラーム的過去との断絶であるとの前提に立つならば、文字革命は、新字の受容と旧字の排除という両輪があってはじめてなりたつといえるからである。

人びとの慣習的の文字使用を変化させるのは容易ではなかった。官庁や地方自治体など公的機関において、形式上は新字使用に移行したものの、現実には旧字がかなり広範に用いられていた。知識人もまた同様であった。ここには単なる習慣の問題以上の意識が潜んでいた。トルコ社会において旧字の威信は継続しており、旧字の知識、使用能力が、知識人としての知的格式、教養レベルを示す指標となっていた。

次世代教育の分野でも旧字をめぐる問題が生じた。「国民形成事業」に対する抵抗感は、イスラームに基礎を置く伝統的な価値体系が根強く残っていた共同体、とりわけ地方の村落部において非常に強かったことがこれに影響した。当局は、彼らが旧字文化の守護者とみなした宗務関係者が、就学期の子どもたちに対してみせる動きに警戒していたものの、多くのムスリム子弟はクルアーン学習という形で、アラビア文字に触れ続けていた。旧字から新字への端境期は、当初の想定以上に長く継続した。

第七章では、文字革命をめぐる言説の内容の特徴と形成、定着の背景について考察した。新字普及と旧字排除という文字革命の両輪がいずれも軋みをあげるなかで生み出されていたのが、革命の不可逆性の強化するための言説である。トルコ語の音声的特徴と新字の調和や、難解な旧字表記システムの弱点など、文字革命や新字導をめぐる一見中立的かつテクニカルな言説は、新字の言語学的な正しさを担保した。それとセットで用いられたのが愛国意識を刺激する独立解放戦争やムスタファ・ケマルに関わる情緒的な言説であった。これにより、共和国的理念を表象するにふさわしい「トルコ文字」には非常に強い政治的な意味が付与されることになった。典型的な言説が定期的に生産されることで、新字と建国の父の分ちがたい結びつきは強化された。新字導入により読み書きが容易になり、国民が識字化しているという文字革命の成功言説の広がり、新字の生みの親とみなされた国父アタテュルクへの尊崇の念をさらにかき立てた。この意味で、新字とアタテュルクはその正統性を相互補完する関係にあったといえる。そのなかで新字は政治的に権威づけられ、その改良に言及することが批判されるまでに「“共和国的” 聖性」を獲得していったのである。

本来、簡易化の必要性から議論されはじめた表記法改革は、トルコ共和国期を境にその本質的目的を一変させた。途切れることなく続いてきた政治的軋轢の結果として生じた、それぞれの文字への過剰な意味付けは、ある文字表記を学ぶこと、あるいはある文字表記の使用を拒否することが政治的表明となりうる状況を生み出した。文字革命の本当の代償は、オス

マン的伝統へのアクセスを困難なものにしたということではなく、文字が異なる普遍的価値観を抱く集団の対立を煽る潜在的な火種となったことである。建国期に打ち立てられた文字革命という金字塔は、社会の分極化に苦しむ現代のトルコ社会にも影を落とし続けている。